

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

ひとりのバイオリン職人ができるまでの道

～クレモナでの弦楽器製作～

池淵 考介

2013年夏、チェロケースと大きなリュックを持った私は、愛しの彼女を日本に残し、香港への飛行機に乗っていた。もちろん目的地は香港ではない。乗り継ぎ便の行き先であるイタリア、ミラノ市からさらに先にある田舎町クレモナだ。

思い起こせば2011年春、公務員の職を捨て、東京にあるバイオリン製作学校に入学したのがこの道の出発点だった。それ以前からバイオリン製作者へ強い憧れを抱いていた私にとってはむしろ必然の道であったのかもしれない。



ミラノから電車で一時間半程のところのクレモナと言う街がある。北イタリアを貫くポー川の流れのちょうど中間にある街だ。この街は十六世紀から続く弦楽器製作の聖地であり、皆一度は聞いたことのある名前、ストラディバリウスの暮らした街である。現在でもクレモナ市内だけで200以上のバイオリン製作工房があり、多くのマエストロたちが腕を競う由緒正しい弦楽器の街だ。

私はこの街にバイオリン製作のため5年間ほど滞在した。その経験を今回書かせていただく。

クレモナ市にはバイオリン製作の伝統維持のための国際的な専門学校がある。生徒数は1年生から5年生までで総勢200人ほどであるが、イタリア人以外にも世界中から集まった様々な国籍の人間が通うことのできる学校である。

私はその学校の入学試験に合格し、通学を許されたのである。

入学準備や滞在許可証の申請を終え、いよいよ本場クレモナでの勉強が始まった。歴史などバイオリン作りには直接関係のない内容の授業もあったが、当然それらもイタリア語で行われるので、製作実技、通常授業共に勉強の毎日であった。

私は学校に通う傍ら、半ば弟子として、ある有名な工房に身を寄せることができた。

それは日本でも名の知られたクレモナの老舗工房であり、私はその場所でイタリア生活のほぼ全ての日々を過ごすことになったのである。

さっそく私のバイオリン製作の修業が始まった。

東京の専門学校に通っていた経験がある私にとっては、バイオリン製作など自分には容易であるという根拠のない自信があった。楽器を一本も作ったことのない者も多いクレモナの学校でも、私は経験者として一目を置かれる存在であったのだが、私が通い始めた工房でその自尊心は砕け散るのであった。

「Casinista！（カジニスタ！）」。私が工房に通ってからの数年間、工房長から毎日言われ続けた言葉だ。イタリア語でぐちゃぐちゃにする奴という意味である。つまり、私がいることによって工房を混乱させているという嫌味に他ならない。

工房に通いだしてようやく私は自分がいかに何もできない存在かを思い知らされた。今から思えばいつクビになってもおかしくない失態をも多々しかした。そんな日々の中で私は一つ一つ自分の出来ることを増やしていくのである。

その後の休業期間はまさに壮絶なものであった。朝から夜まで仕事をもらい、失敗を繰り返し、怒られ、それでも負けずに家に帰ってから夜中まで自分の楽器を作り続けた。

同時に学校でも、工房では通常作らないバロックバイオリンをクレモナの巨匠と言われているジョルジョ・スコラーリ先生から学んだ。瞬く間に一日、一日が過ぎて行った。

工房に通い始めて3年の月日が経った。さすがに3年も経つとCasinistaの汚名は返上できたようだ。

唯一、バイオリンのニスの上塗り工程だけは、マエストロや工房長のみならず、他の工房の職人たちがよりはかに綺麗に仕上げる自信があり、周りからも認められていたため、ようやく私も工房に腰を落ち着かせることができるようになった。

しかし平和な時間を過ごしている時に限ってまた新しい問題が発生するのがイタリアに住むということである。

クレモナ市から一通の手紙が届いた。内容は外国人向けのイタリア語の試験を受け、パスしないと滞在許可が出せなくなるというものであった。

私は3年間滞在しているとは言え、バイオリン製作しかしてこなかったため、語学力が著しく欠けており、その通知に震え上がった。八方手をつ

くし、試験を受けるまでにはどうしなければいけないかを教えてもらうことができたが、なにも知らない外国人一人では到底たどり着けない道のりであったらう。

結局私はクレモナ市が無償で行っている外国人向けの語学教室に週2日に通うことになった。内心私には、語学の勉強をしている暇があればバイオリン製作の勉強をしなければならないという思いがあったが、こればかりはどうすることもできなかった。

しかし通い始めると面白いもので、それまでも耳ではイタリア語に親しんでいたため、勉強するほどにいろんな意味が分かってきた。語学教室に通う日々の中で、イタリア語が確かに私の身に付いてきたと実感でき、とても嬉しかった。今思えばこの問題は私に降りかかる運命だったのかもしれない。

通い始めて約半年後に私は試験を受けた。そして見事に滞在許可証に必要なレベルよりもワンランク上の試験に合格したのであった。

この話のオチであるが、滞在許可証申請の時にはもう試験を受けなくても良くなっていた。イタリアの制度や法律は頻繁に変更されるので泣かされる外国人は非常に多いのだとか。

クレモナに住んで4年目の夏、私は新たにパルマにある国際バイオリン製作専門学校に通い始めた。その学校はクレモナの学校とは違い、楽器製作と演奏の授業以外の“余計な”授業がなく、さらに週に2日通えばよかった。



【パルマ国際バイオリン製作専門学校】

クレモナとパルマは電車で約1時間半、学校はさらにバスで40分ほどのところにある。

中世の古城を改装して作られた建物で、その

外観はイタリアでも珍しいものである。

生徒数は5年生までで10人しかいないのだが、指導は現代の巨匠と呼ばれるマエストロが3人で、行なうという大変贅沢な学校であった。

1年生から通い始めた私は、楽器製作の現場で鳴らした腕と地道に勉強したイタリア語のおかげで充実した学生生活を送り始めたのであるが、またしても運命が私に牙をむくのであった。

その年の滞在許可証を申請した際、通常通り書類は受理されたのだが、待てど暮らせど一向に滞在許可証が発行されなかったのである。

イタリアはなんでも遅い国だから心配しなくていいよと、最初のうちはマエストロ達やアパートの大家さんは笑っていたのだが、待ち始めて6か月が経ったある日、またしても運命の手紙がクレモナ市から届いたのである。

恐る恐る開けた手紙の内容は、「公立の学校に通っていた者は私立の学校に変更する際、卒業証明もしくはそれに準ずる書類を提出せよ」と言うものであった。猶予は2か月。

まさにじゃんけんの後出し状態であった。確かに学校を変更したのは事実であり、私も変更する前に下調べをし、同じバイオリン製作学校間での移籍と言った前例もあるので問題なからうと踏んだのであるが、考えが甘かった。変更後、通い始めて既に半年も経っており、いまさら対応など出来るはずがなかった。

その後はまさに四方八方に手を尽くした。その筋のコネクションのあるマエストロに協力していたいたり、新たに通える公立の学校を探したり、市の法律相談の弁護士に相談したりと、考えられる手は全て当たって見たのだったが、結局、私に出されたレッドカードを覆すことはできなかった。

失意のどん底にあった私はその旨を涙ながらに工房長に話した。「私はどうしてもまだやらねばならぬことがある、日本にまだ帰りたくない。」そう訴えた。そうすると工房長も「お前が悪い奴じゃないことはみんな知っている。お前はまだ帰るべきではない！勉強が終わるまでここにいろ！」と言ってくれた。

その瞬間、また運命が開けたと私は思った。「猶予の2か月間を全力で過ごそう。今まで積み重ねて学んだこと以外の、まだ私に出来ないこと

を全てこの2か月で学んでやる！」それが私の到達した決意であった。

私はまず、マエストロにチェロ作りを最初から最後までやらせてもらえるようお願いした。

工房で作られる楽器は手作りとは言え分業制だったため、私もチェロ作りの経験は何度もあったものの、最初から最後までひとりで作ったことはそれまでなかった。とりわけ、工房長がやっていた重要な工程を私はまだ知らなかったのである。

幸い、マエストロは快諾してくれた。後は時間との戦いであった。

チェロ製作だけではなく、もし自分が日本に帰って一人になった時にできなくてはならないことを考えると、クレモナで覚えなければならぬことはまだまだ山積みであった。

その後の2ヶ月間はまさに嵐の様な日々であった。しかし、今までの経験があれば乗り越えられないことなどほとんどなかった。工房長やスタッフも協力してくれたため、それらの日々が全て私の血肉になっていく実感すら覚えたものであった。

そして2ヶ月後、私はチェロを完成させた。重要な作業の工程やデータをまとめ、日本で同じ仕事ができる様に仕事を体に覚えさせたのであった。

ただ、話はこれで終わりではない。この時期になると私も観念していたので、次回イタリアに入国できるようになった時のためにコントラバスの製作の勉強ができるようにマエストロに打診をしたのである。

いよいよ滞在期限の切れる日が迫り、私は皆に見送られてクレモナを後にした。私は Ritorno subito！（すぐに戻ります！）と言い、工房の仲間たちは Buon viaggio！（良い旅を！）と言って見送ってくれた。

そして私は空港で滞在許可証を返納し、日本への帰路についていたのであった。

< バイオリン専門店 アトリエ VERNICE >

HP: <https://www.ateliervernice.com/>

e-mail: atelier.vernice@gmail.com

(バイオリン専門店 アトリエ VERNICE 代表・
当館元受講生)

ローマ滞在日記⑩

フェルトリネッリでつかまえて

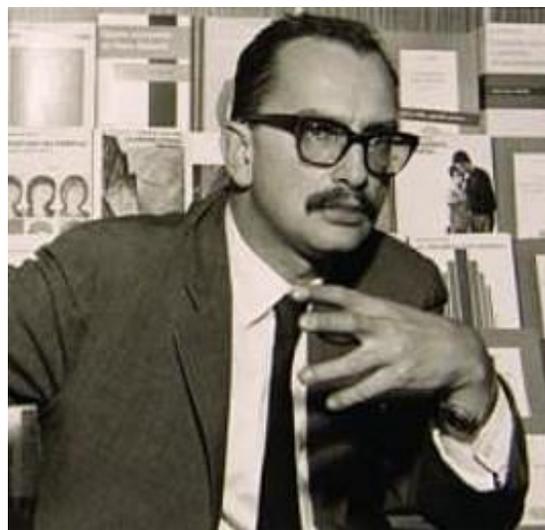
二宮 大輔

イタリア語学習者の皆さんの中には、きっと読書を趣味とされる方もいるだろう。となると、イタリア語の本に興味を持つのは自然の道理だ。ところが「実際にイタリア語の本を読んで面白かった」というような声はあまり聞かない。それなりに高度な語学力が求められるという理由もあるだろうが、どこから手を付けていいかわからないというのが、より大きな障害になっているのではないだろうか。インターネットで調べたところ、2016年にイタリアで出版された本の総数は約 63,000 タイトルとのこと。一年間でこれほど莫大な数になると、好みの作品を見つけるのは確かに一苦労だ。その事情は日本語の本でも同じはずだ。だが母国語となると、これまでの読書経験や多数の情報源があるので、さほど迷うことなく自分好みの本にたどり着ける。それならば、イタリアの本に興味はあるけれどイタリア語での読書経験や情報源を持っていない潜在的イタリア語読者のために、僭越ながらいくつかの情報を提供しようというのが、この文章の趣旨だ。誰かが邦訳した作品ではなく、未知のジャングルに分け入るような開拓精神で自らイタリア語の本を読み進めるのは実に楽しい。イタリアに行った際、大手書店や古本屋、またはイタリアに行かずともオンライン・ショップという名のジャングルに皆さんが足を踏み入れるとき、今回の話が少しでも行き先を示すコンパスの役割を果たせたなら幸いである。

1. フェルトリネッリでつかまえて

まずは個人的によく通ったローマのラルゴ・アルジェンティーナにあるフェルトリネッリを例にとって考えてみたい。フェルトリネッリは、高名な貴族の出であるジャンジャコモ・フェルトリネッリが19

54年にミラノで創設した出版社である。トマーシ・ディ・ランペドゥーサ『山猫』などの名作を世に送り出したジャンジャコモは、左翼活動家としての一面も持っており、1972年ひとりきりでテロの準備に勤しむ最中、ダイナマイトを誤爆させてその犠牲になったとされている。彼の死後、すでに離婚していた元妻インジェ・シェーンスタールが、残された出版社を引き継ぎ、事業の発展に大きく貢献した。そしていまやイタリア随一の出版社兼書店に成長したというわけである。フェルトリネッリに限らず、イタリアの出版社はたいがい同名の本屋も有しており、大手となると各都市に店舗を構える一大チェーンになってくる。そこでは、自社の出版物だけでなく、様々な出版社の書籍が広く取り扱われており、特にフェルトリネッリやモンダドーリなどの最大手はその傾向が強くなる。つまり、講談社や集英社が本屋も兼ねていると想像してほしい。



【ジャンジャコモ・フェルトリネッリ】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/Giangiacomo_Feltrinelli

それでは、ラルゴ・アルジェンティーナのフェルトリネッリに入ってみよう。ごつい黒人の警備員が立っている正面入り口を越えると、目に入ってくるのが平積みにした人気新刊コーナー。DVD と CD が販売されている店の左半分は置いといて、右半分の壁面に注目したい。左の壁面から、作家名のアルファベット順で並べられた Romanzi (小説)の本棚が始まり、ぐるりと時計回りに次の部屋

まで続いている。Zの項まで行きつくと詩のコーナーとなり、最初の部屋の右側後方に戻ってきて、サスペンスと推理小説コーナー、右側前方に旅行書・ガイドブックという配置になっている。二階には絵本・児童書コーナーに加えて、トイレ、カフェが併設されている。だが売り場はこれで終わりではない。一階の Romanzi コーナーの奥にもまだ部屋が続いていて、そこが Saggi のコーナーになっている。イタリア語で「評論」を意味する Saggi は、哲学書、歴史書、宗教書、政治家の自伝などなど、小説ではない多くのジャンルを含んでおり、それが部屋の奥の二階部分まで、所狭しと陣取っている。日本でいうところのジュンク堂のような、蔵書数200万冊を超える本屋はイタリアには存在しない。いまご紹介しているフェルトリネッリのラルゴ・アルジェンティーナ店が蔵書7万冊で、イタリア最大級ののだが、それでも十分にジャンглの様相を呈しているのだ。

2. Romanzi か Saggi か

上記の説明だけでは、書店内の様子などとても想像できないと思うが、ここで強調したいのは、イタリアの本の分類が Romanzi と Saggi の二つに大きく分かれるという事だ。フィクションとノンフィクションという日本語英語に置き換えられなくもないが、折角なのでイタリア語の本を選ぶときは、イタリア語の感覚で「小説」と「評論」を意識しておきたい。というのも、この評論=Saggi のコーナーは、幅広いジャンルが含まれるため、ひとつのテーマを専門的に扱うというよりは、テーマが多岐に広がるジャンル横断型の本が多く、日本のノンフィクションとは意味合いが少し異なる気がするからだ。

そんな Saggi の中で近年、一大旋風を巻き起こしているのが2007年創業の Chiarelettere 社だ。同社は今が旬の社会問題の取り上げ方がことさらにセンセーショナルで、新刊を出すたびに注目を浴びている。例えば、2014年にローマで発覚したマフィアと政治家の癒着問題 Mafia Capitale の真相に迫った『ローマの王たち』(*I re di Roma*)や、イタリアが如何にイギリスからメディア操作されているかを主張した『植民地イタリア』(*Colonia Italia*)などのタイトルは象徴的だ。

この Chiarelettere 社の本から日本語に訳され

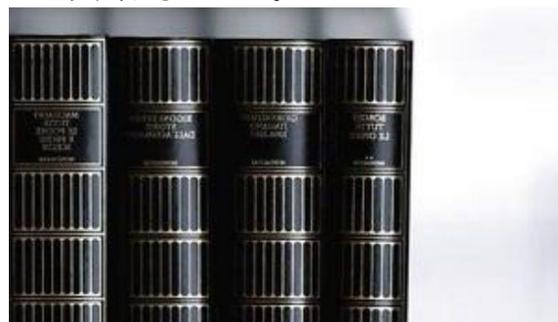
たものもある。2010年の『バチカン株式会社—金融市場を動かす神の汚れた手』(*Vaticano spa*)。バチカン内部の人間から託された非公開文書をもとに、通称「バチカン銀行」と呼ばれる宗教事業協会が行っていたマネーロンダリングの実態を暴いた、非常に濃密な内容となっている。

この他にも Saggi コーナーには、数多くの良書が潜んでいる。本屋に入ったなら、まずは Romanzi か Saggi の区分を考えてほしい。文学賞を冠にしたわかりやすい宣伝文句や、ベストセラーが多いので、どうしても Romanzi に目が行きがちだが、Saggi の中にもきつと好奇心を刺激される本があるはずだ。

3. アンソロジーで体系化を

とは言うものの、Saggi に関しては私よりも詳しい研究者がたくさんいると思うので、ひとまず Romanzi の置いてある、フェルトリネッリのラルゴ・アルジェンティーナ店前方部分にとどまりたい。基本的に Romanzi の ABC は国内外・新旧問わず一緒に並べられている。

ここでは基本的に外国の小説家は別として、イタリア語でものを書く作家の中から、日本では特に認知度の低い新人作家を選ぶのか、イタリア文学を代表するベテラン作家を選ぶのかという問題について考えたい。ベテラン作家とは誰のことか。それは本棚を占める割合が圧倒的に高いルイーダ・ピランデッロ、イタロ・カルヴィーノ、アルベルト・モラヴィアなどのこと。



【重厚感のある I Meridiani の装丁】

出典：<http://losbuffo.com/2016/05/03/i-meridiani-mondadori-lorigine-la-storia-e-lo-sviluppo/>

ここで一つの指標にしたいのが、I Meridiani である。I Meridiani というのは、モンダドーリ社がフラ

ンスのプレイヤード叢書を模して作りはじめた世界文学全集のこと。このシリーズから全集、もしくは選集という形で本が出ていれば、その作家はイタリア文学の殿堂入りを果たしたと言っても差し支えない。ちなみに外国の作家も数多く扱うこのシリーズでは、日本から川端康成と三島由紀夫が選出されている。

こうしてベテランか新人かの区別が大方ついたら、読みたい作家の選定に移ろう。ベテランの代表作に関しては、意外なことに、というか当然のことながら邦訳が出ているので、それを参考にされたい。問題は、とめどなく現れる新人作家にどう対峙していくかということだ。新聞の書評や友人の推薦なども大変参考になるのだが、個人的な体験として大変お世話になっているのがアンソロジーの存在だ。数は少ないのだが、ミステリーやエロスなど、テーマを設けて様々な作家の短編を集めたアンソロジーが刊行されている。私のお気に入り入りはローマのミニムファックス社が2009年に刊行した『国家試写会』(Anteprima Nazionale)だ。「見えない私たちの未来を描いた九つの視点」という副題が添えられたこのアンソロジーでは、ポーニャの匿名作家集団ウー・ミンや、現代アメリカ文化に大いに影響を受けたトンマーゾ・ピンチョなど、個性的な作家が名を連ねている。



【5人組だった作家集団ウー・ミン】

出典: https://it.wikipedia.org/wiki/File:Photo_wuming.jpg

かといってアンソロジーを意識しすぎると、「彼らはミニムファックス派だ」というような安易な決めつけに陥る危険も孕んでいる。だが、そもそも文学全般において、雑誌や交友関係をもとに体

系化することで、読者は過去の作品を理解してきたという側面は否めない。その最先端に現代作家のアンソロジーがあるのだ。ゆえに、本屋に行って何やらよさげなアンソロジーを発見したならばしめたものである。

昨年11月にアイルランドを旅行した際、ダブリンの本屋で、なんとイタリア人作家の英訳短編アンソロジーを発見してしまった。その名も『イタリアン・アウトサイダーズ・ストーリーズ』(Italian Outsiders Stories)。刊行は2013年。選ばれているのは『死都ゴモラ』を著したジャーナリストのロベルト・サヴィアーノ、テレビでも活躍する人気ミステリー作家カルロ・ルカレツリなど、有名どころを中心に計6名。前書きによると、もともとはイタリア国内の日刊紙コッリエーレ・デラ・セーラの付録として刊行されていた短編シリーズらしい。こう考えてみると、実はイタリア側からも現代のおすすめ作家が積極的に発信されている。上手にそれを受信すれば、楽しいイタリア語読書ができることは間違いないだろう。

(京都ドーナツクラブ映画担当/当館元受講生)

イタリア現代小説の今

～ローマ散歩編～

京都ドーナツクラブの二宮大輔さんをお招きし、かつて住まわれていたローマを舞台にした現代小説の講演会を開催します。

- ・講師: 二宮 大輔(京都ドーナツクラブ)
- ・会場: トラットリア・ルチアーノ
(日本イタリア会館京都本校から西に約50m)
- ・日時: 2017年9月18日(月・祝) 13:00-15:30
(13:00-14:00 ビュッフェランチ、14:00-15:30 講演)
- ・参加費: 受講生・一般: 4,000円
個人維持会員: 3,000円

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>